卒業生が振り返る

先生の授業を通して私たちの中に生まれた「軸」と「修正力」

高校教育における本丸とも言える教科指導。教科学力の育成のみならず、大きく変化する社会で必要な汎用的な学びの型・思考法を生徒に身に付けさせることは重要なテーマだ。教室での学びの中での「軸」と「修正力」の涵養（かんよう）の有り様を卒業生との対話の中に探した。

福井県立若狭高校定時制教頭
中森一郎
なかもり・いちろう　教職歴 29 年。同校の全日制に 1997 年～ 2005 年に勤務。2013 年に定時制の教頭として再赴任。国語科。

福井県立若狭高校卒業生
上野真史
うえの・まさし　山梨大工学部機械工学科卒業後、同大学院医学工学総合教育部修士課程を修了。若狭高校在学時はバスケット部に所属。医療機器メーカーに勤務し、精密医療器具の開発に従事。社会人歴３年目。

福井県立若狭高校卒業生
道下拓毅
みちした・ひろき　神戸大農学部生物機能化学科（現・生命機能科学科）卒。若狭高校在学時はテニス部に所属。食品メーカーに勤務し、機能性食品の生産技術開発および生産管理に従事。社会人歴５年目。

福井県立若狭高校
◎ 1897（明治 30）年創立。2011 年度からスーパーサイエンスハイスクール指定校。◎全日制・定時制／普通科・文理探究科・商業科・情報処理科・海洋科学科／共学／生徒数は1学年約 300 人。◎ 14 年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、京都大、大阪大、金沢大、福井大などに 81 人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大などに 延べ 242 人が合格。

集団の中で自ら学ぶ姿勢を身に付けさせたかった

道下　僕と上野君は理数科（当時）の同級生で、2・3年生の時に中森一郎先生に担任をしていただきました。国語の教科担任も中森先生でしたが、先生の授業は生徒が考える時間が多かったと思います。国語は、きちんと論理的に読めば、ちゃんと答えにたどり着ける教科なのだと先生の授業で理解できた気がします。

上野　グループで考える時間が多かったことが印象に残っています。僕は国語が得意ではなかったのですが、先生の問いに対して、みんなで話し合いながら論理的に考えて答えにたどり着こうとしていました。

道下　本文の要約にも多く取り組みました。僕も国語が苦手だったので、他人に的確に伝わる文章を書くのにとても苦労しましたが、全体の中から大切な部分を見抜き、説明する力が養えたように思います。

上野　先生は、自ら考えることをとても大切にしていました。国語が苦手だった僕は、グループで考える時、つい誰かの意見に安易に賛同しがちでした。そうした時、先生に「君自身はどう考えているんだ?」と問い掛けられました。

中森　自ら学ぼうとする力の育成は、当時も今もとても大切にしています。簡単に答えを与えるのではなく、苦労して自分の答えにたどり着く授業になるように配慮していました。そして、一人ひとりの考えを全体で共有することで、各自が自分の答えを更に深めるような授業構成を心掛けていました。クラスが全体として育つ授業でなければ、学校で学ぶ意味がないという強い思いがあったからです。

学びの型を修正するコーディネーターを目指す

中森　担任として意識していたのは、「学びのコーディネーター」に

なることでした。生徒との面談では、国語に限らず各教科の勉強のやり方を聞き、その生徒に合った学習法を一緒に検討しましたし、学習に関する生徒の悩みをまとめて、該当教科の先生に伝えたこともありました。

道下　僕らのクラスだけ、中森先生の発案で、各教科の授業評価をやったこともありましたよね。

中森　各教科の先生の指導力を更に高めるきっかけにしてもらいたかったし、君たちにとっても自分の学習の姿勢を修正する良いチャンスになると考えたからです。また、定期考査の2週間前から、学習の予定と結果を記録する学習計画表を毎日回収していましたが、それは学習をテーマにした交換日記のような存在でした。10人程の生徒は、テスト期間以外でも毎日記録し、私に提出していました。

上野　僕もその1人です。部活と勉強の両立や、テスト成績の伸び悩みなど、いろいろなことを書いて、先生に相談しました。学習面で自分に自信が持てず、気分が沈みがちでしたが、学習に関する思いを先生に聞いてもらえたのは、僕にとって大きな支えになっていました。

道下　僕はテスト期間に学習計画表を使いましたが、成果を検証し、次の計画作りに生かすことが習慣化できたと思います。

異質を受け入れ、力とする軸を生徒に育みたい

中森　若狭高校では20年以上前から、2年生の夏休みに全員が夏目漱石の『こころ』を通読した上で、2学期に作品全体を扱う授業を展開するのが伝統になっています。君たちも取り組んだこの学習は近年、「どのような問いを立てればより良い読解が実現するか」を生徒が協同して考えるという観点で更に研究・開発が進められているのです。学ぶ目的を生徒自身が明確にし、主体的に学び続けていく力を身に付けるための新しい試みです。

道下　10年前の中森先生の授業でも、みんなと話し合って、自分の答えを練り上げ、生徒が授業を創っていたように思います。今思うと、先生の授業は、答えのない問題が山積する現代社会で、目の前のテーマに対して自分なりの答えをストーリー立てて創っていく力を身に付けるものだったのですね。僕にとって、答えのないテーマを仲間と議論するのはとても楽しく、国語の学習の動機付けにもなりました。きっと今の若狭高校の授業は、僕らの時以上に楽しくなっているのでしょう。

上野　授業で、自分の意見を受け入れてもらう経験をしたから、僕もしっかりと考えた上で違う意見を受け入れることが出来るようになり、自分の考えを修正できる力が身に付いたのだと思います。今、僕は開発の仕事に就いていますが、ささやかなアイデアを否定しない態度が、新しい発見につながることを実体験しています。僕の勤める会社はグローバル化を進めていますが、異質なものを理解して、それを自分の力とすることは、今後ますます必要な軸になると感じています。それは、若狭高校の教育目標の「『異質のものに対する理解と寛容の精神』を養う」ことと同じだと思います。

中森　私たち教師には、教科の専門性を土台に、どんな力を付けさせたいかをデザインした上で、生徒主体の活動を通して一人ひとりが成長の実感と自己肯定感を得られるようなファシリテーターとしての役割がますます求められるのだと思います。2人と久しぶりに話をして、改めてそう思いました。ありがとう。